

公益財団法人ギャラリー エークウッド
136-0075 東京都江東区新砂1-1-1
竹中工務店東京本店1F
Tel: 03-6660-6011
Fax: 03-6660-6097
Email: gallery@a-quad.jp

GALLERY A⁴
1-1-1 Shinsuna Koto-ku
Tokyo 136-0075, Japan
Tel: +81-3-6660-6011
Fax: +81-3-6660-6097

<https://www.a-quad.jp>



表紙 ©Shigeo Ogawa



暮らしを愉しむ
デザイン

建築家・阿部勤
のいえ展

阿部勤のハードボイルド・ワンダーランド

岡部三知代

ギャラリーエークウッド館長／主任学芸員

阿部勤は、坂倉準三建築研究所に所属していた1966年より、タイの学校を建設するプロジェクトの担当として、1970年まで日本とタイを行き来して過ごした。そこで、日陰をつくり、風通しを確保しながら自然と同化して過ごすタイの生活様式に触れたことは、後の阿部の建築に、心地よさという要素が深く根をおろすこととなった。

「中心のある家」は、住宅街の一角に現れた小さな森のように樹に覆われ、十字路に斜めに建っている。1階はコンクリートの壁で囲われているが、2階の横連窓は外の景色を取り入れ開放的で、ふんわりと屋根が覆う。この家で阿部は、「囲う」「覆う」という二つの空間構成と、「開く」「絞る」という建築の方法を使っている。

低い天井の玄関から、中心のリビングに入ると、囲いの内側にいても庭への空間の広がりを感じ、囲いの外の天井の吹抜けから、2階の窓の光がさす。水平にも、上下にも、空間を開いたり絞ったり、変化をつけ、招いた人を愉ませる。また、二重の囲いで生まれた隙間を巧みに活用し、居心地の良い場所を幾つも作る。何事も、少し手を掛けて、深く関われば関わるほど、関係が深まる…。住まいも同様に、手を掛ければ楽しい場所に育つというのだ。

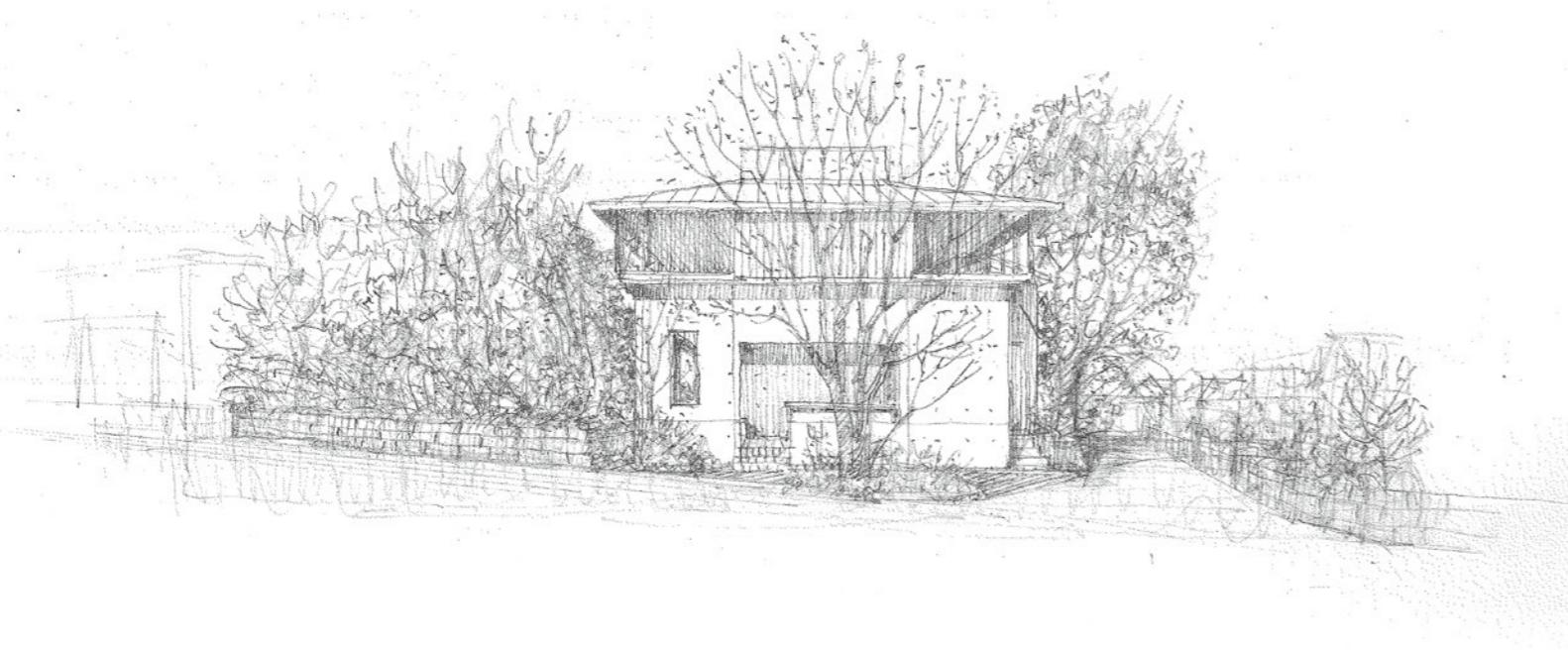
阿部にとって、台所はおもちゃ箱。年をとると忘れっぽくなるから、道具は仕舞わない。出し放しでも、気持ちよいように出来るだけ気に入ったものだけを置く。階段は、昇るものではない。本を積んで、腰掛けながら読書する場所だ。

将来の身体の変化を想定した改装案のスケッチも残している。老齢になったら、南側の庭にサンルームを増築して、浴室・洗面・トイレを設置する。日当たりがよく、自然に開放された心地よい場所でゆっくり湯につかり、のんびりしたい。そうすれば、衛生的で介護者にとっても快適な場になることだろう…。

“竣工後20年以上経ても発見がある。空間の贅(ひだ)は、時が経つほどに深みを増し、浪漫を感じる色彩のある家。”とは、阿部さんが設計した「いえ」に住む人の声だ。“動線が複雑、打放しの壁はメンテナンスが大変。だが、それを差し引いてもこの家にまた住みたい…”。空間の醍醐味を味わえるのはクライアントのみの至福であろう。

「中心のある家」は、竣工後50年の間、阿部のライフスタイルの変遷とともに空間の用途を変え、街並みともなじみながら、庭の木が育つように味わいを増してきた。この仕事場兼遊び場で阿部は、木漏れ日や、吹抜ける風を感じつつ、時には料理をして、人をもてなしながら語り合う時間を愛した。決して語らず、譲らず……。訪れる人に、そして、住み手に暮らしぶりをゆだねた。阿部に、その形の、その寸法の、その配置の理由を聞いても煙に巻くに違いない。答えは一つではなく、阿部の鉛筆にしかないのだから…。

建築家による100㎡のこの小さな「いえ」は、決して甘くない、阿部勤のハードボイルド・ワンダーランドなのである。



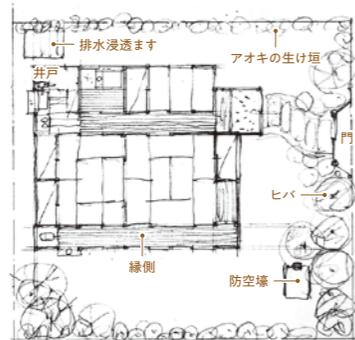
中心のある家(外観スケッチ) 画:阿部勤



左 中心のある家 2F (連続窓の空間)
 上 中心のある家 1F (中心の空間)
 下 中心のある家 1F (キッチン)
 写真すべて ©Shigeo Ogawa

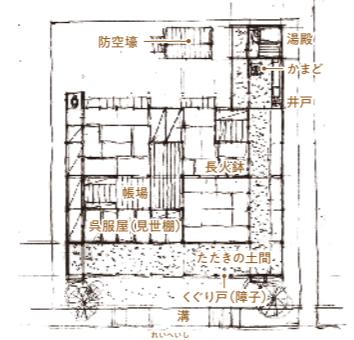
桜台の借家 1938-47

1936年、東京都文京区に生まれた阿部は、2歳のときに練馬区桜台の借家へ引っ越し、そこで幼少期を過ごした。家の門は木製の引き違い戸で、外壁は南京下見板張り、周囲をアオキの生け垣が囲む佇まいだった。幼い頃の阿部は内向的で、外に遊びに行くことは少なく、火鉢の前でじっとしていることが多かったという。家の中では縁側や縁の下を遊び場として、庭のヒバの木に登ったり、ときにはツリーハウスを作ったりしていたそうだ。



父の実家 1944-45

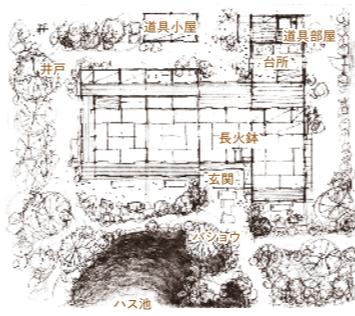
戦争が激しさを増し、阿部は栃木県足利・御厨町みくりやまちの父の実家に疎開した。呉服屋を営むその家は商家ならではの帳場やくぐり戸、L字型の土間があり、過ごしていて楽しい場所だったそうだ。近所の人々が気軽に訪れて会話を交わすような地域社会と、自然に恵まれた環境の中でのびのびと過ごす一方、空襲により避難する日々が続いたという。防空壕の湿った赤土の匂いや暗闇の中で過ごした時間は、後の記憶のなかに長く刻まれたと語っている。



父方の実家の庭にあった防空壕 米国の戦闘機グラマン

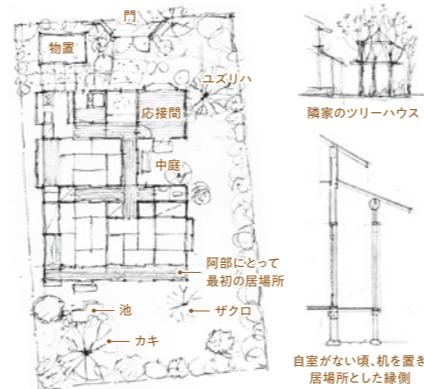
母の実家 1943-45

この頃、阿部は足利にある母の実家で過ごすこともあった。そこは日本庭園のある立派な屋敷で、中央のハス池を囲むようにシモツケやバショウが生い茂っていた。裏庭には祖父の道具部屋があり、庭道具や大工道具がずらりと並ぶ光景を目にするたび、阿部は心を躍らせていたそうだ。屋敷の廊下を走り回って遊び、時には得意な絵を描いて周囲を喜ばせることもあったという。こうした日々を通じて、もともと控えめだった阿部は、次第に積極的でたくましい少年へと成長していったそうだ。



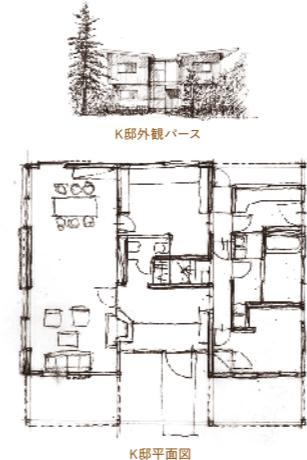
桜台の持ち家 1947-74

終戦後、桜台に戻ると自宅は残っていたが、周囲の木造建築はすべて焼失し、わずかにコンクリートや土蔵の一部が残るのみだったという。後にコンクリートの住まいを志向するようになったのは、この体験と無関係ではないと阿部は語っている。借家で2年過ごしたあと、桜台に築15年の家を購入し、家族でそこへ移り住んだ。その家には洋館風の応接間があり、珍しい間取りだったという。妹の白杵洋子さんによると、母親はよく一晩で家具の配置を変え、そのたびに家の雰囲気が変わって面白かったそうだ。



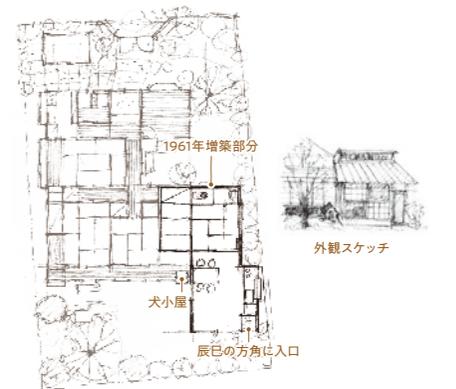
坂倉準三建築研究所時代 1960-1971

阿部は早稲田大学建築学部にて在学中、横浜シルクセンターの雑誌用図面を描くアルバイトを経験する。その仕事を通じて坂倉準三の建築に惹かれ、卒業後は坂倉準三建築研究所に入所し、本格的に建築の道を歩み始める。最初に一人で任されたのは目黒区の住宅「K邸」。コの字型の平面と南北棟をつなぐ空間、バタフライ屋根が特徴的な設計だった。坂倉からの指導を受けながら設計を一から担当し、責任を感じながらも、やりがいを持って設計に向き合ったという。



桜台の家族の家 1961-74

坂倉準三建築研究所に入所してまもなく、阿部は結婚し、桜台の実家の隣に8坪の木造平屋を増築した。家相を考慮し、幸運を招くとされる辰巳の方角に入口を設けたという。やがて子どもが生まれ、家は手狭となり、独立した住まいを考えるようになる。そうした中、69年に坂倉が他界し、阿部は事務所を独立。それを機に、住まいを自分で設計することに決め、埼玉県新所沢に「中心のある家」を建てた。増築した家は解体したのち、妹家族のための「桜台の家」(1987年)を設計した。



スケッチ 阿部勤
 所蔵 株式会社アルテック建築研究所
 解説 高橋紫 (日本大学芸術学部 若原一貴研究室)

タイ国文部省職業教育学校(タイ25校計画)

萬代恭博

坂倉準三建築研究所にタイ25校計画の打診があったのは1965年11月、竣工は坂倉準三死去の翌年(1970)であった。当時の坂倉準三建築研究所は30名の規模ながら新宿駅西口広場(1966)、神奈川県立近代美術館新館(1966)などが進行し、阿部は神奈川県新庁舎(1966)に続いて本計画に参画した。タイ国文部省が世界銀行の借款により計画、全土に25校が分散しており建物の総延面積は176,000㎡に及んだ。少人数のチーム(戸尾任宏、清田育男、阿部勤、吉田好伸、室伏次郎)で挑むためにチーム内では当初、国内で標準化の方針を立て日本で作った材料を運んで組み立てる方法を研究した。ところが最初の現地調査後にチームは方針転換を行う。当時のタイの生活、建設事情(物資運搬にゾウが登場する現場もあった)を調査することによって大変なカルチャーショックを受けたという。一方で、阿部は「タイの建築が素晴らしく、外国から行って欧米の感覚で造っちゃ行けない。現地にフィットした現地人と協力して現地の材料を使って教育施設、教育環境を作るべきだということに大きく方針転換した。」と語っている。

教育棟に着目して配置平面図を参照すると、機能上の主目的である教室は北側に配置され、南側に廊下が配置されていることが分かる。次に断面図を参照すると、半外部空間の廊下にベンチが造作されて日陰の憩いの場として計画されている事が分かる。列柱の架構を境に3mの片持ち庇と列柱から教室壁までの2.5mとを併せて5.5m、南北の寸法比として34.3%がこの半外部空間として設計されているのである。このように、機能上の主目的空間に対して外部環境とのインターフェイスの領域に大きな関心を払って思考されていることを読みとることができる。国際様式に対する信頼感に基づいて風土性、地域性に向き合う姿勢は、師の坂倉準三にも共通点を指摘することが可能であろう。

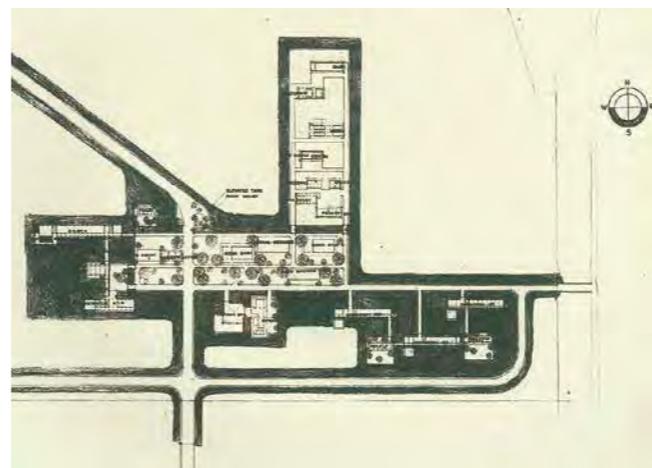


タイ25校計画所在地。改善計画はタイ全土にわたる。

タイの学校建設プロジェクト



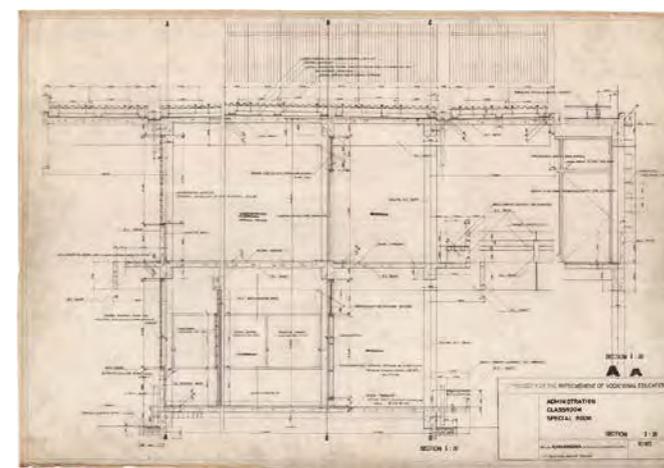
ラカバン農業大学 カフェトリウム 雨季の洪水時 所蔵:株式会社坂倉建築研究所



ラカバン農業大学配置平面図 左上が教育棟 所蔵:株式会社アルテック建築研究所



ラカバン農業大学 教育棟 所蔵:株式会社坂倉建築研究所



事務室・教室・特別室 標準設計矩計図 国(文化庁国立近代建築資料館)所蔵

タイで空間の原点を探る

高橋 紫

日本大学芸術学部 若原一貴研究室

阿部は約60年前にタイを訪れ、自然と一体化した住まいの在り方に触れた。

タイの伝統的な住まいは高床式で、急勾配の屋根に覆われた寝室棟と厨房棟が並び、それらをつなぐように広々としたテラスが設けられている*1。テラスにはベンチや壺、プーゲンピリアの鉢が置かれ、人々はそこで食事をしたり、くつろぎながら日々の生活を営んでいたという。また、街道沿いの町では、道と店の境界が曖昧で、店先に置かれた椅子やテーブルで人々が思い思いに過ごしていた。阿部は、どこへ行っても人々の生活が風景の一部になっていると感じたという*2。

このような住まいと風景が一体化した暮らしは、日本の伝統的な住宅とも共通するものがある。庇や縁側、土間といった空間が、内と外を隔てながらも緩やかにつながり、そこに暮らしが生まれていた。阿部はタイの住まいに、日本の田舎の風景を重ね、懐かしさと心地よさを感じたという*3。こうした体験を通じて、阿部は住まいと風景が一体となる在り方は、異なる文化を超えて共通する住まいの原点だと感じたのではないだろうか。

阿部は、タイで見た住まいの在り方を自身の設計にも生かした。その代表的な例が、自邸「中心のある家」である。この家は二重の囲いによって、中心の空間を外周空間が取り囲む構造になっている。外周空間の幅は約2.1mで、内にながら外の気配を感じられる、縁側のような場を生み出している。そこにキッチンやダイニングといった生活機能を配置することで、暮らしの場は外部と緩やかにつながり、快適な空間となっている。タイで目にした、内と外が緩やかにつながる住まいの開放感や自然との一体感。その魅力が、自邸にも息づいている。

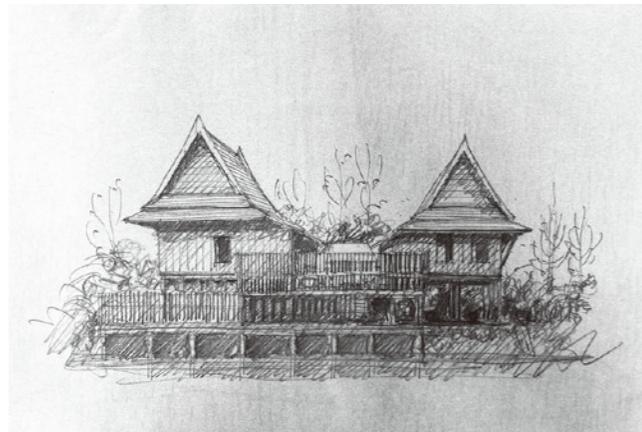
*1 布野 修司、田中 麻里、チャンタニー・テランタナット、ナウイト・オンサワンチャイ

『東南アジアの住居 その起源・伝播・類型・変容』京都大学学術出版会、2017

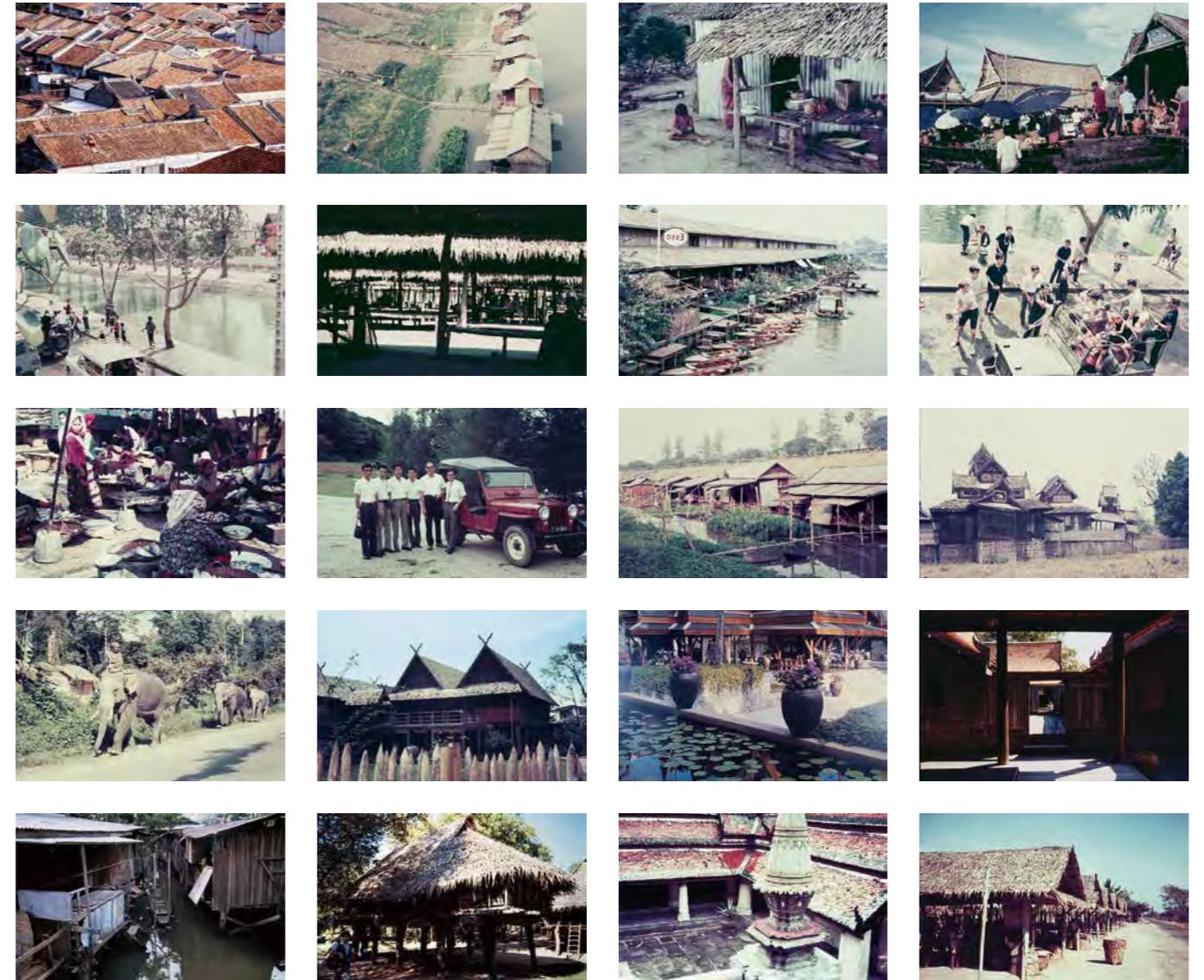
*2 阿部勤「風景としての住まい」『マイホームプラン』1991

*3 阿部勤「ロコンニ-屋外生活空間-」『住宅特集』1999

上、右頁 阿部勤が撮影したタイの景色
下 阿部勤が描いたタイの伝統的民家のスケッチ
所蔵 株式会社アルテック建築研究所



阿部勤が見たタイの暮らし



私は、この家が自分の創り出した作品だという感覚をもっていないのだ。創り出したというより探し出したというほうがしっくりくる。

中心のある家

河内英昭
cue DESIGN

1974年、阿部勤が38歳の時に竣工したこの住宅は、壁と梁がコンクリート造、屋根と床が木造で構成された地上2階建て混構造の建物である。整然と格子状に区画された新興住宅地の中で、この場所の建物だけが敷地に対し斜めに振られて配置されている事で異彩を放っている。

1階は「回」の字の様に二重に囲われた壁によって構成されており、その壁に設けられた開口によって囲いの内外の関係は変容し、様々な場所が生まれている。「回」の中心部は奥まった場所でありながら風は通り抜け、開口からは外部の気配と光を感じ、洞窟の中の様な安心感に溢れている。

2階は1階と同様の構成ではあるが、腰の高さから上部が全て出窓となっており明るい空間が展開されている。その出窓を覆うように軒は張り出し、建物を優しく包み込んでいる。阿部はこの場所を「外からは中の様子は見え難いが、中からは外の様子が良く見え、守られている安心感がある。」と鳥の巣に例えていた。

またこの住宅には阿部が集めた阿部のお気に入りのモノが所狭しと散りばめられている。それは椅子であったり、読みかけの本や雑誌、陶芸家の器や川で拾った石等、実に多岐に渡る。これら全てにストーリーがあり、建物の一部となり、居心地の良さを生み出している。

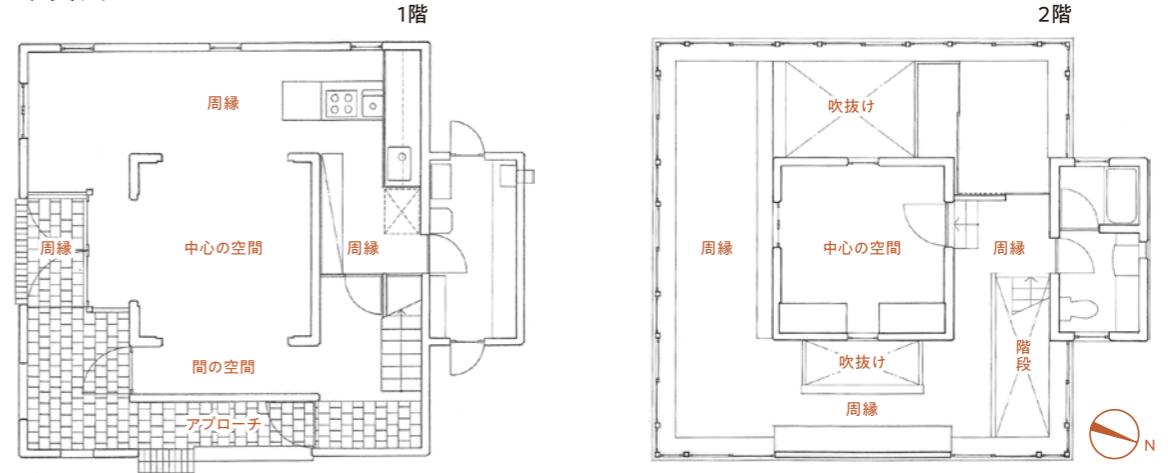
建物の配置を敷地に対して振った事によって生み出された空地には様々な木々が植えられ、年月の経過と共にまるで森の様に自由に育ち、建物は緑との境界を曖昧にし、まさしく森の中に紛れた鳥の巣の様である。



竣工 1974年
構造 RC+ 木造 地上2階
延床面積 102m²
設計 阿部勤

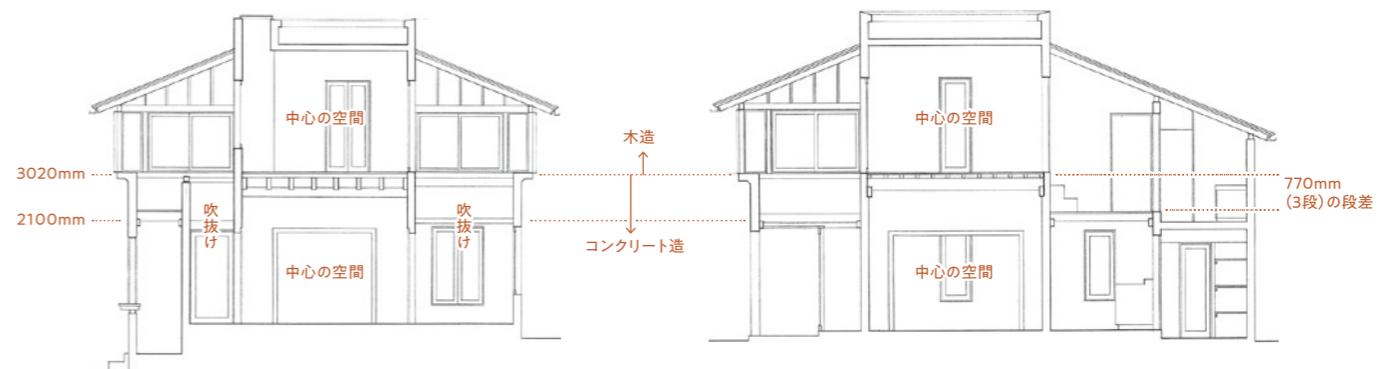
写真すべて ©Shigeo Ogawa

平面図



中心のある家を上から見ると、二重の囲いの形をしている。壁やドアで区切るのではなく、ひとつづきの周縁部分に食事、調理や仕事などの生活の場が配置され、回遊しながら過ごす。コンクリート造の1階は、囲われていながら外の様子がうかがえる、動物的本能に訴える安心感がある。対して2階は腰壁から上が木造で、水平にガラス窓が続き、庭の木々と日光を感じる開放的な空間になっている。

断面図



1階の中心の空間は3.02mと天井が高く、対して周縁部分は2.1mと低い天井や吹抜けなど、場所によって異なる表情がたのしめる。天井高の差により、2階の中心の空間は廊下より3段分高く、特別な「内(うち)」の雰囲気が出されている。吹抜けは、人の気配や音、窓からの光を伝え、1階と2階をゆるやかにつないでいる。

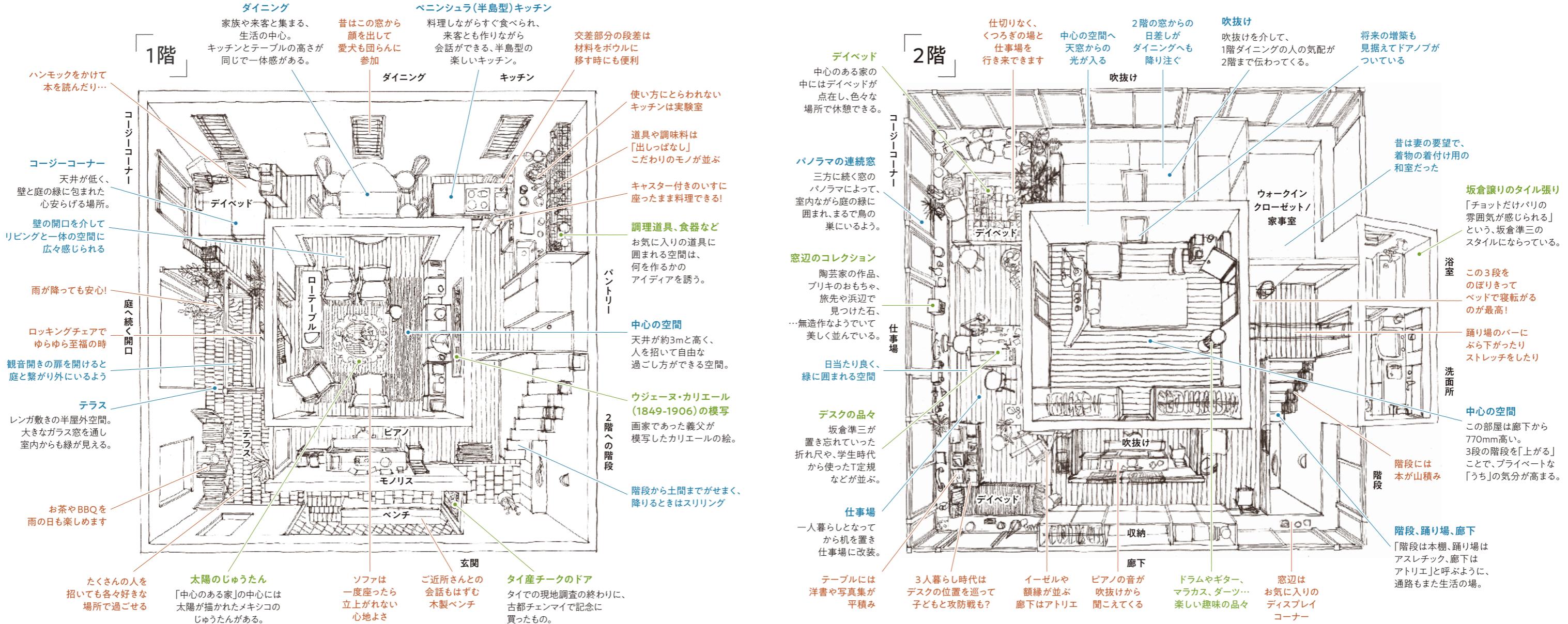
図面提供 株式会社アルテック建築研究所

暮らしを楽しむデザイン

「中心のある家」の建築的ポイント、
こだわりのつまった暮らしの楽しみ方を解説

— 建築的ポイント
— お気に入りの品々
— 阿部さんの暮らしの楽しみ

スケッチ 出典：
阿部 勤 著・藤塚光政 写真
「中心のある家 建築家・阿部勤自邸の50年」
(学芸出版社、2022年)

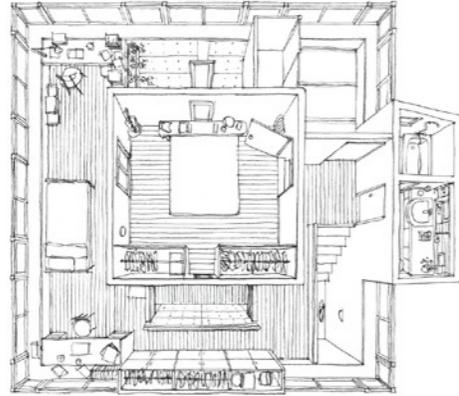


暮らしの変遷

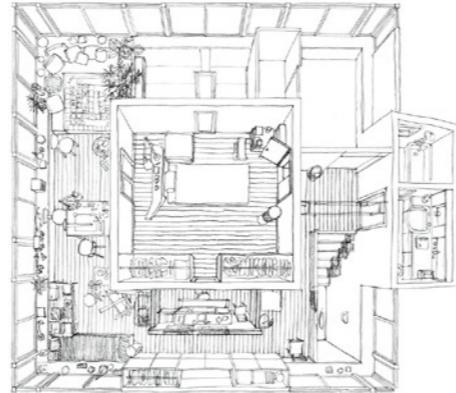
家族の形に合わせて、自由に変化を重ねてきた住まいの変遷を紹介

スケッチ 出典：
阿部勤 著・藤塚光政 写真
「中心のある家 建築家・阿部勤自邸の50年」
(学芸出版社、2022年)

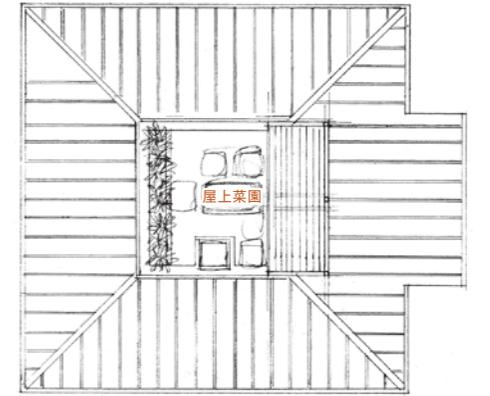
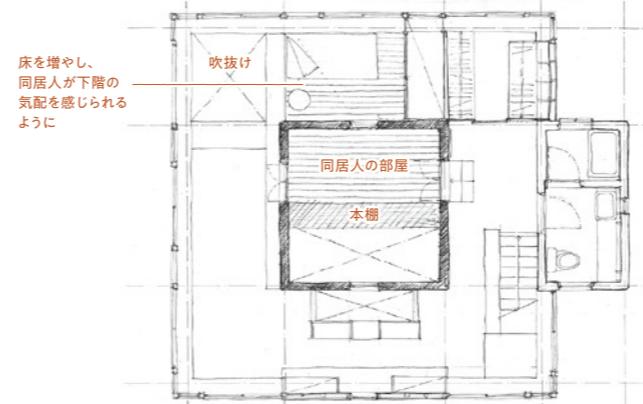
1980～
三人家族のいえ



1995～
一人暮らしのいえ

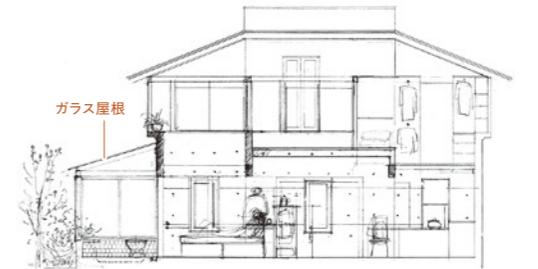
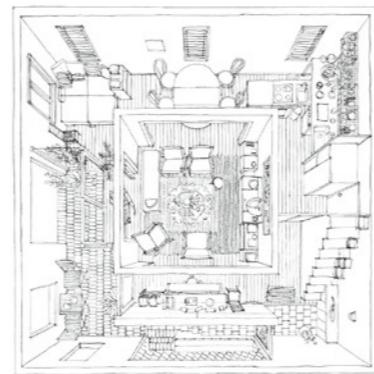
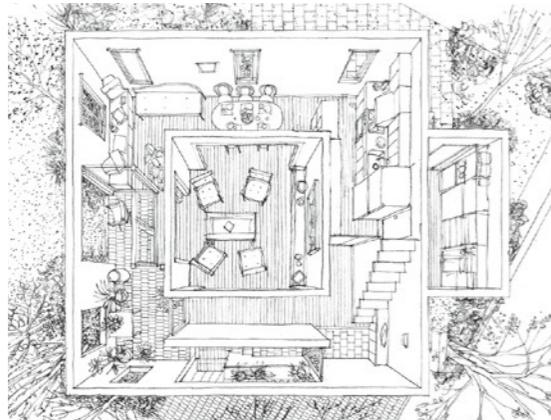


2030～
これからのいえ



屋上

2階



断面

1階

成長と変化

住まい手の変化に合わせて、空間の使い方も自由自在に変化した。妻と息子との3人暮らし時代、息子の成長と共に2階の細長い空間は占拠され、阿部の書斎が1階に移っていった。ダイニングでは中心の空間を向いて家族横並びで食卓を囲み、外で飼っていた犬も時折窓から顔を覗かせた。

多様な過ごし方

妻が1993年に他界し、息子が独立してからは、阿部の一人暮らしの家となった。1階と2階の角にデイベッドが置かれ、よりさまざまなくつろぎ方ができる空間が生まれた。元々壁に面していたキッチンは、料理しながら食べられ、来客との会話も弾むT型のペンシユラキッチンへ改造された。

新しいバリアフリー

著書「中心のある家」には将来に向けてのスケッチも描かれている。南側に増設したサンルームの中に浴室やトイレを設け、高齢者にも心地よくくつろげる「コンサタリー(Conserbatory温室+Sanitary衛生設備)」というアイデアのほか、屋上菜園ができている。2階は吹抜けに床を張り同居人の部屋を増やすこともできる。

建築家・阿部勤が目指したもの

若原一貴

建築家・日本大学芸術学部教授

1974年に誕生した「中心のある家」は実験的な都市型住宅の傑作として住宅史にその名が刻まれている。延床約30坪という小さな面積でありながら、その空間の力は色褪せることなく、多くの人が憧れる理想の住宅といつて良いだろう。一方、阿部勤が生涯で設計した住宅は約100軒あまり。では自邸からはじまり最後の作品までのおよそ半世紀に渡る活動の中で、建築家・阿部勤が考え続けてきたこととは何か。今回私はその手がかりを求めて、完成時期の異なる3つの住まいを訪問した。ここでは私が体感したこと、そして住まい手のインタビューを通して「阿部勤が目指したもの」について考えてみたいと思う。

はじめに訪れたのは郊外の住宅地にある「津田沼の家」(1991年竣工)。傾斜のある敷地を利用して諸室が積層する様に設計された、彫刻のためのアトリエ付き住まいである。高低差を巧みに利用した断面の計画が秀逸で、縦に伸びる空間が独特な「緊張と弛緩」を生み出していた。続く「練馬の家」(2001年竣工)はゆったりとした敷地に、コンクリート・ボックスが並行配置された中庭をもつプラン。平面からディテールまで空間に凹凸があり、刻々と変化する光の移ろいを捕らえた陰影のある表情がここでの生活を豊かに彩っている。最後に「国分寺の家」(2009年竣工)は、前の2作と比較すると、とてもおおらかな設計である。計画段階で施主側もプランを考え、それを阿部に見せるたびに「いいですね!すばらしいですね!」と言われたそうだ。その結果、開放的な場と籠(こ)まれる空間を内包するシンプルで骨格の存在が強い建築が誕生した。

まずは建築の形態の共通性から考えてみる。平面の特徴としては、正方形に近い箱がいくつも並んでいて、その囲まれた箱の対角線を意識するように壁がくり抜かれ、視線がしゅっと抜けるようになっている。そして外に開きつつも内に籠るように閉じる場所が用意されている。断面の計画も特徴的。階段のある場所だけでなく、あちこちに上に向かう空間の抜けを感じさせる仕掛けがある。そして構造はRCと木造の組み合わせになっている。だが、こうした空間構成の分析だけではその魅力が十分に説明できない。もっと心理に働きかけるところにその答えはあるのではないだろうか。それが何かと考えた時、阿部が建築に「相反する事象」を共存させようとしているからではないかと気づいた。津田沼では「緊張と弛緩」、練馬では「光と影」、国分寺では「籠れる場と開かれた場」と、その空間体験を言語化しようとすると必ず対極的な言葉の組み合わせとなる。自邸の構成を説明する言葉「中心性と回遊性」も同様であろう。一般的に建築設計では、条件を整理し合理的な解決方法に向かおうとする。しかし、阿部の住宅にはそうした合理性では到達し得ない世界、むしろ「非合理的」な仕掛けに溢れた建築を目指しているように感じる。さらに、住まいは安易に生活者に寄り添わない方が良いとすら思っているのではないかと感じた。「受け止めること、拒否すること」それもまた相反で説明される。

最後に、3つの住宅の住まい手の言葉に共通していたのが「飽きのこない気持ちよさ」である。それは完成した住まいが家族構成、敷地条件、など全てが異なる条件であっても、その根底には阿部の目指す普遍性が貫かれているからだろう。「正しく古いものは永遠に新しい」。これは阿部が好んで使っていたスウェーデンの画家、カール・ラーションの言葉である。阿部は建築をモノとしてではなく、人間の移ろいゆく心のための場と捉えてきたのではないか。だからこそ阿部勤の<いへ>たちは、いまも生き生きと輝いているのだ。



2.1mのモジュールによって生まれた空間



玄関(右上)



彫刻製作の場(現在は居間)



居間と食卓

津田沼の家

津田沼の住宅地に建つ混構造の住宅。接道する南北の道路の高低差が5mあり敷地の1/3が北側斜面という土地に対して、擁壁のようにL型のコンクリート躯体を配置し内部が敷地の傾斜に呼応する。この高低差とコンクリート打ち放しの表情の組み合わせが、まるで住むことを拒絶するような厳しさを与えている。一方で南に残された平場の土地には芝が広がり樹々が生き生きと育ち、穏やかな庭が広がる。そこに面して、平屋のような開放的かつ柔らかな木造の住まいが、緑の隙間から控えめに顔を覗かせる。

この木造部分を「幅2.1m」という寸法を基準に設計、それがこの家全体の寸法の基準にもなっている。これは「中心のある家」の外周をぐるりと囲む寸法と全く同じである。2.1mという大きさは一間(1.8m)よりは広いのだが、部屋として使うにはちょっと狭い。だが、もしこれが一間半(2.7m)の空間だと庭と建物の関係性が全く違って見えてくる。あえて生活の場を少し小さくすることで庭との一体感が生まれる感覚は、自邸で発見した感覚であろう。阿部自身はこれを「細長い縁側状の空間」と表現している。

敷地の特性から生まれた立体的空間のなかに、硬さと柔らかさ、緊張と弛緩といった様々な「対比」をつくるのが、クライアントの潜在的要望であると理解し設計されたこの住まい。完成から30年以上経過し、「空間を肉体が感じる」「飽きない、まだまだ生かされてない」と語る住まい手の言葉が、阿部勤の目指す建築の普遍性を証明している。

竣工 1991年
構造 RC+木造 地下1階・地上3階
延床面積 183.20m²
設計 阿部勤・小西恵/アルテック

撮影 八木元春

練馬の家

私鉄の駅から10分ほど歩いた場所、都市と郊外の間環環境に建つ住宅。ゆったりとした敷地に二つのコンクリートの箱を平行に配置。そこに直交する動線を加えたコの字の平面となっている。箱の短辺は0.9m×5で4.5m、長辺は2.1m×4で8.4m。長辺方向だけではあるが、ここでも自邸と同じ「幅2.1m」が採用されている。その効果はまず一階の玄関に現れている。ポーチから段差なく室内に入ると、「廊下には広く部屋には小さな空間」が直線的に広がっている。変な言い方だが「部屋としての目的」が生まれにくい良さがある空間であり、まさに縁側のような居場所となっている。さらに2階ではこの「幅2.1m」の空間にキッチンが上手に納まっている。シンクを直交させ両側から使えるようにしているのもユニーク。また2棟をつなぐガラスのサンルームと浴室に面したサンデッキも縁側状の空間の特性が生かされている。

平面構成としては、1世帯住宅ながら2箇所に設けられた階段によって立体的な回遊性をもつのが特徴的。南の階段は大きな吹抜けに面してゆったりと設計されているが、北側の階段幅は45cmと普通の幅よりかなり狭く設計されているのには驚いた。どこにいても中庭を中心に視線があちこちに抜けることで、面積以上の広がりを感じる。さらに多彩な光と心地よい風の抜けが、日々の生活をさりげなく彩っている。「きれいな月夜に中庭や1階の廊下が月光で照らされると、室内が幻想的な雰囲気になります」という住み手の言葉からも、ここでの生活の楽しさが十分に伝わってくる。機能だけではなく「豊かさ」をもった美しい住まいである。

竣工 2001年
構造 RC+木造 地上2階
延床面積 176.17m²
設計 阿部勤・安立悦子／アルテック

撮影 八木元春



2階居間



サンデッキ



キッチン



玄関



1階リビング



キッチン



住まい手が施工した庭



鉄製の階段



1階リビング



中庭

国分寺の家

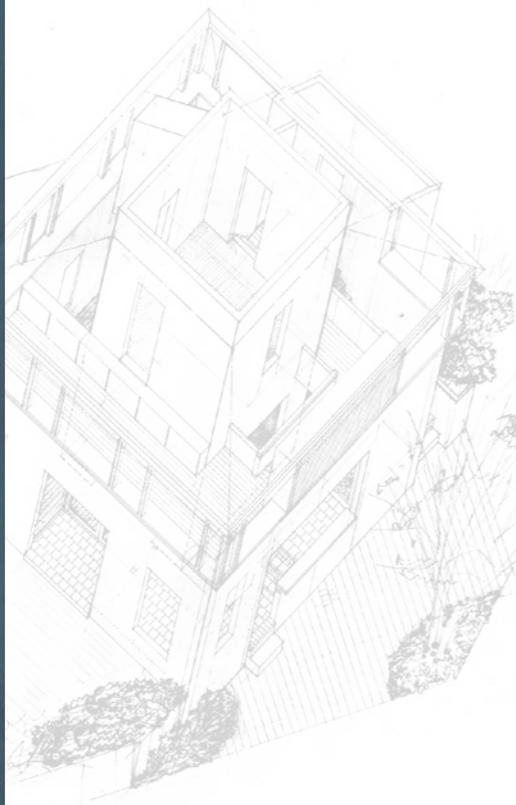
敷地は北東と北西が道路に面する角地。そこに7人家族の住まいとして計画された住宅で、現在は夫婦二人の住まいである。1階部分はコンクリート造で2階は木造。基準となる寸法の考え方は、2階の木造に合わせて0.91m(3尺)を基準とし2.73m(1.5間)グリッド。一般的な4畳半の大きさを基準とした平面計画となっている。「幅2.1m」の寸法をもつ自邸や他2件の住宅と比較すると、平面的なゆとりがかなり感じられる。また吹抜け空間がないことも他の住宅の手法と異なっている。4畳半をあえてポンポンと配置し、シンプルな中庭形式としたこともこれまでの設計手法との差異を感じた。

しかし住まい手の話を伺うと、あえてこうした素っ気ない手法を採用したのも納得がいく。家族構成の変化を考慮し、プランが生活を縛ることなく変化に対応できることを考えていたのであろう。廊下をつくらず回遊プランであること、中庭を通じて斜めに視線が抜けること、どこにいても光と影が感じられること、居場所があること、外との繋がりがあることなどなど、平面寸法の操作を抜きにしても、この住宅には十分に阿部建築のエッセンスが詰まっている。さらに、施主自身の手によって飾り棚や収納だけでなくたくさんの植物が追加され、時間と共に建築が徐々に造り上げられてきた。それは現在進行形であり「永遠に未完の住宅」であると言えるのではないかと。

プランニングの段階から、クライアントの意向を受け止めながら、幾度となく案が変わり現在の案に落ち着いたという。そうした仕事の進め方も含め、この住宅では阿部が目指す建築の普遍性へと一歩進んだのかも知れない。建築家の優しい眼差しを強く感じる住まいであった。

竣工 2009年
構造 RC+木造 地上2階
延床面積 142.66m²
設計 阿部勤・河内英昭／アルテック

撮影 八木元春



所蔵 株式会社アルテック建築研究所



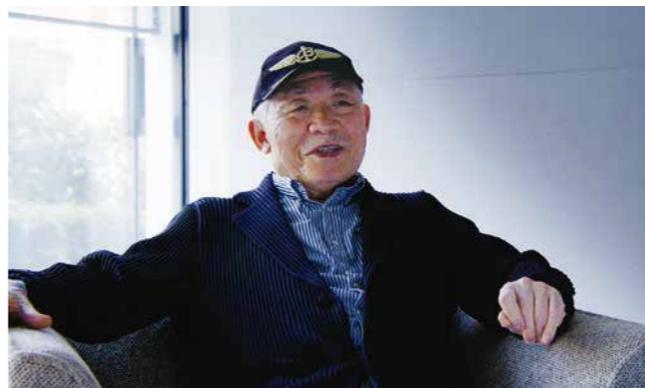
室伏次郎
建築家

タイのプロジェクトにて

大学を卒業して、坂倉準三建築研究所に入る前に挨拶に行ったら、「ざくろ」という非常に高価で有名なお店へお昼ご飯に連れていかれました。カッコいい兄貴だな、と。それが最初の出会いです。1966年にタイ国から研究所に、全国に展開する25の学校の改善計画の依頼が来たのを受け、僕と阿部さんは、2週間の調査旅行に行きました。タイでは、外気のままの空間に暮らしていて、軒下テラスの外の空間にベンチや日陰があって、素朴なつくりけれども自然と一体の居心地のいい空間が形成されていました。タイの生活習慣や風土に根ざすことなく、日本のプレハブ技術を輸出してモダンイズム建築の考え方で、短期間に大規模な建築デザインをすれば、品質確保して確実に成功はするでしょう。けれどはたしてそれは良いことなのだろうか、と僕たちは帰国後に話し合い、現地の既存の技術や素材を生かして暮らし方を重視した軒の深い、外部に開放された建築を作ることにしました。「中心のある家」もこの体験を生かしてタイの住まいのある種の典型を継承したものです。

断面の魔術師

おそらくですが、阿部さんは断面から建築を考えていると思います。その断面の魔術師としての技が一番生かされているのは「桜台の家」だと思います。半地下のヌック、空中に浮いた床、吹抜け、トップライトなどで構成される断面方向の変化の度合い、その豊かさが、阿部さんの計画する家のベストだと思います。阿部さんはおとぼけとユーモアに満ちたのほほんとした人物に見えるけれども、一方で密かに綿密に資料整理をきっちりやるような一面もありました。いつももう一人の自分が見ている、他者の目を想定して振る舞っているということだったのではないかと、思います。「中心のある家」での阿部さんの住まいも「見せる」ということをよく考えていたのではないのでしょうか。家族と共に暮らす「家」ではなくて「阿部パビリオン」だったと思います。



藤塚光政
写真家

アベキンさん

阿部さんより三つも年下なのに、僕は最初から「アベキン」と呼んでいました。どこか甘えん坊なところがあって、人柄もよく、皆に親しまれている阿部さんらしい愛称です。誰が名づけ親と言うことはなく、自然に広まっていったんです。

「中心のある家」を撮る

『中心のある家』を一冊にまとめるにあたり、撮影は一日のみと決めて撮りに行きました。ファーストショットは斜めに建つ、緑に覆われた外観。当日は、アシスタントなし、アベキンさんと僕一人で、その空間に向き合うと決めていました。すべての建築には生々しさがあります。建築家の情念が、撮る僕の心も動かすのです。その情念の切片を切り取ったプレバパートみたいな本にしたいと思いました。平面が正方形で、どの方向も同じ長さの壁で囲われた一室空間なので、ぐるぐる歩くとシーンがどんどん変わっていく。窓際には好きなものがたくさん置いてあって、家全体がもうアベキンでした。奥さんが亡くなると、彼は一人で料理してすぐ食べられるように、キッチンを改造しました。友達が来て、そこが中心になりました。アベキンは家族の関係や形が変わっても、また新しいことを始めました。この家は本当に阿部さんの自画像だと思います。

25年経って美しい家

阿部さんが設計した何軒かの家は、竣工後25年以上美しく維持されている建築に与えられる「JIA25年賞」を受賞しています。どのオーナーの感性も人柄も素晴らしいし、家を住みこなしています。僕も何軒か見に行っていますが、どの家も竣工時よりも美しくなっていました。色気っていうのかな…、建築の部位が強く主張はしないけれど、美しさを保つための軒や、湿気をつめない風の通り抜けがきちんとしている——大事なことだと思います。



秋山正子
認定NPO法人マギーズ東京 共同代表理事

阿部さんとの出会い

マギーズ東京の建設計画のときに、阿部さんと出会いました。阿部さんは、奥様をがんで亡くされているということもあって、がんとともに歩む人たちが相談に行ける場所の大切さを深く理解していらっしゃいました。そして、マギーズの建築空間のコンセプトの、自然素材を使い、庭との関係にも心を注いでいることに共感されて、建築全体の監修をしてくださることになりました。

鉛筆で語る

打ち合わせでは、若い設計者や、関係者と、セッションするかのよう鉛筆でデッサンをする姿をよく見せていただきました。時には「秋山さん、その本棚のところに立って」と言って、私の肩の線をちょうどそこに合わせて線をひいて、「中で働く人の背丈に合わせて寸法を切るんだよ」と、使い手の側にも立ちながら、設計してくださった。また、若手の人のセンスを生かして、仕上げのタイルなどを一緒に選びに行き、使い手側の感覚とか好みとかを、生かしていくその姿勢が素晴らしいと思いました。

心の調律

阿部さんは、体調を崩されてから、弱っている姿を人には見せなくなかったのではないと思うのですが、看護師である私には会いたいと言ってくださいました。病状が芳しくない中で、ご自身のこれからをどうしたいのか、ということをはっきりと思い描きながら病気に向き合われていたと思います。最期のときまで、握った鉛筆は離さず、机でデッサンをされたり、あちこちに電話をされたりして、希望は捨てていませんでした。環境や建物人が癒し、治療の薬に匹敵するほど大事だということを、常に心に留めていらして、「木の家具や空間は、心の調律をするんだよ」と。そういう言葉がずっと出てくるのが、阿部さんらしく、本当に素敵なお方だな、と思いました。

阿部勤の住宅

渡邊 康

建築家・日本大学生産工学部教授

阿部勤が室伏次郎氏と共に、坂倉準三建築研究所とアーキヴィジョンを経て、アルテック建築研究所を設立したのが1975年39才の時であり、自邸である「中心のある家」を『都市住宅』誌に発表した翌年です。その後40代に「賀川豊彦記念松沢資料館」、JIA新人賞受賞の「レーネサイドスタンレー」「スタンレー電気技術研究所」を設計すると同時に「常盤台の家」「美しヶ丘の家」などの住宅をつくっています。1986年からの50代に「横浜雙葉学園・高校聖堂」「シャトレーゼ白州工場」「岡山県営中庄団地」などを設計すると同時に「桜台の家Ⅲ（現ぼんたな）」「津田沼の家」などの住宅をつくりました。その後の60代に「シャトレーゼ豊富工場」「横浜雙葉学園・西棟」を手がけると並行して「国分寺の家」「練馬の家」などの住宅をつくっていますが、この頃から建築雑誌に掲載することが少なくなり、70才になってからはあまり発表していないので、どのような設計をしているか知られていなかったのではないかと思います。2023年に86才で他界した時に足跡を探ると、雑誌に発表してなくても充実した住宅の創意工夫を続けていたことと、その時点で6件の住宅計画が動いていることに驚かされました。さらに48年間に渡りつくり続けた100戸ほどの住宅だけでも、概観すると、ずっと追い求めていることは変わらないとも見えますが、初期には手探りであったものの意図が明確になっていき、混構造の考え方やつくり方が変化していく様が見えてきます。そのように「中心のある家」に始まる数々の住宅は、いずれも読み解く面白さに溢れていると改めて感じます。

阿部の建築の考え方の特徴は、形をつくることよりも、人が建築の中や周りで感じることから考えようとする姿勢だと私は思います。1986年に私がスタッフとして働き始めた時、周りはポストモダンの華やかな造形で溢れていました。そのような中で、計画の初期にはその影響かと思えるスケッチも描くのですが、計画が進むにつれて徐々に形の遊び的な部分は消えていきました。我々は造形で遊ばない以上、建築の中での空間体験を価値のあるものにしなければならぬと必死に考えていました。

また、私がスタッフになりたての頃、設計をどう考えるか平面図を前にやってみせてくれたことがあります。半分目を閉じながら「真ん中から入るだろ…すると右に階段があって光が降り注ぐ、イネ…階段登って低い天井を潜ると上へ開けたホールに出る、イネ…」と平面を指で追いながら想像を膨らませていました。

空間構成の分析 「閉じる」と「開く」

阿部勤の建築の中での空間体験は、初期の「中心のある家」「常盤台の家」を見ると分かりますが、コンクリートの壁構造による囲われた空間と木造の軸組構造による柱だけの空間との混構造で構成され、当初から**閉じた空間**と**開いた空間**を手がかりに様々な場所をつくっていったことが分かります。この点が、硬いシェルターであるコンクリートと人が触れる内部の木造という宮脇檀流の混構造とは異なります。

それらの**開いた空間**は、密集した住宅地では上を向く空間に、郊外では水平に見渡す空間に、あるいは中庭のような半屋外的な土間空間となる場合もあります。それらは**閉じた空間**と共に織り成されシークエンスとなります。それを読み解くために平面と断面の空間の性格を4つに分類し、その組み合わせによる空間の多様性を可視化して分析しました。



上へ開く



- 12 西巢鴨の家
- 21 下馬の家I
- 25 桜台の家Ⅲ
- 26 本町の家



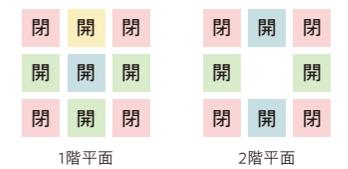
水平に開く



- 2 中心のある家
- 16 美しヶ丘の家
- 31 吉浜の家
- 88 鎌倉の家II



マンダラ状の構成



- 42 柿木坂の家
- 61 白鷺の家II
- 56 練馬の家
- 78 国分寺の家

凡例 「閉じる」

閉 閉じた空間は、内に向かう空間

「開く」開いた空間は外に向かう空間であり、一般に屋内／屋外と分けた時の半屋外や、内部／外部と分けた時の中間領域に相当する空間を意味します。

開 屋根が無かったりガラスの屋根である様な、上へ開こうとするもの

開 壁が無い面やほぼガラスの面がある様な、横へ開こうとするもの

開 床が土であったり土足や植物が植わっている土間の様な、イメージ上の屋外

阿部勤の建築年表

- 一般建築
- 住宅

・阿部勤の設計した全建築を掲載
 ・原則、竣工年を掲載
 ・掲載誌凡例
 Tj:「都市住宅」誌 1979年6月号
 Jk:「住宅建築」誌
 Sk:「新建築」誌
 Jt:「新建築 住宅特集」誌
 キッチンづくり方:「暮らしを楽しむキッチンづくり方」
 阿部勤+安立悦子共著/彰国社

阿部勤の経歴

- 1936 7月7日 東京に生まれる
- 1955 武蔵高等学校卒業
- 1960 24才 早稲田大学第一理工学部建築科卒業
- 1960 24才 坂倉準三建築研究所入所
 - 佐賀県体育館
 - 呉市民会館
 - ホテル三愛
 - 神奈川県庁舎
 - タイ国文部省の要請により25校の農業高等学校・工業高等学校・カレッジ設計監理に従事
- 1966 30才
- 1970 34才
- 1971 35才 坂倉準三建築研究所退社
アーキヴィジョン建築研究所設立(戸尾任宏・室伏次郎と共同主宰)
- 1974 38才
- 1975 39才 アーキヴィジョン建築研究所退社
株式会社アルテック建築研究所設立(室伏次郎と共同主宰)
- 1976 40才
- 1977 41才
- 1978 42才

1 北野邸

2 中心のある家 (私の家) Tj7906 Jk1806

3 五本木の家I Sk7708 Jk0611

4 常盤台の家 Tj7906

5 江田町の家

6 下永台の家

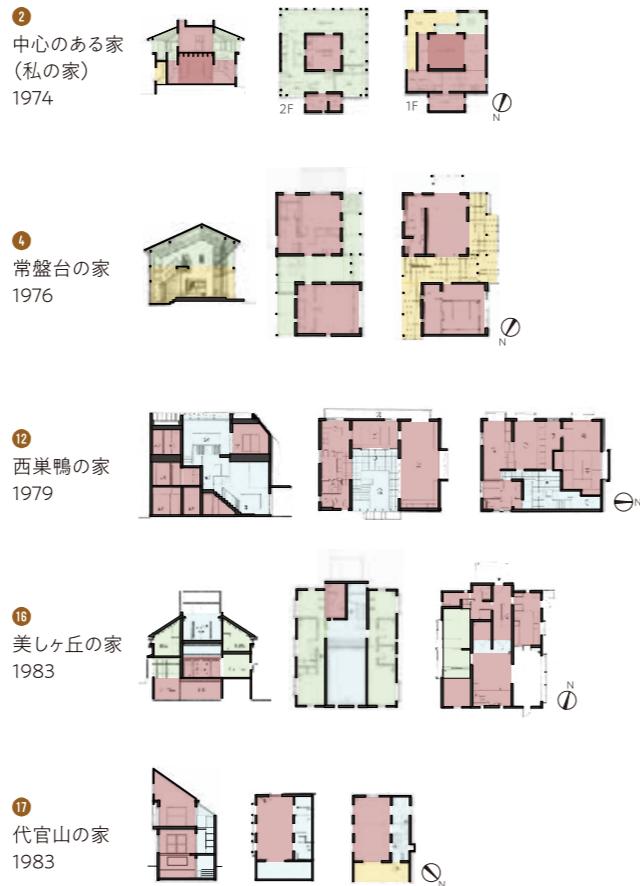
7 桜台の家I

8 白鷺の家I

「閉じる／開く」から見る住宅作品

閉じる	中間領域 (中1)	中間領域 (中2)	中間領域 (中3)	開く
屋内・室内壁・屋根がある	屋根が無い 雨が降る 空が見える	壁が無い 外気である 庭と一体	土足 水流せる土間 植物が生える	屋外・室外壁・屋根が無い

※平面図の色は上記の順で左にあるものを優先している。
 ・左から1つ目は断面図、2つ目以降は平面図を掲載(上階から下階へ)



- 1979 43才
 - 9 成瀬台の家
 - 10 新松戸の家I
 - 11 あざみ野の家
 - 12 西巢鴨の家 Tj8312
 - 13 若宮の家
- 1980 44才
- 1981 45才 早稲田大学理工学部建築科非常勤講師(84年まで)
- 1982 46才
 - 1 賀川豊彦記念松沢資料館
- 1983 47才
 - 2 蓼科レーネサイド・スタンレー
 - 3 東京ガス銀座ポケットパーク
- 1984 48才 株式会社アルテック設立
- 1985 49才 「蓼科レーネサイド・スタンレー」でJIA新人賞受賞
 - 4 スタンレー電気技術研究所
- 1986 50才 『現代建築 空間と方法2』/同朋舎
- 1987 51才 日本大学芸術学部非常勤講師(2012年まで)
- 1988 52才
 - 5 恒ハイム
 - 6 三芳派出所
- 1989 53才 東京藝術大学非常勤講師
- 1990 54才
 - 7 杏コート
 - 8 ヴィレッジミワ
- 1991 55才
- 1992 56才
- 1993 57才
 - 9 横浜雙葉学園・高校聖堂
- 1994 58才
 - 10 シャトレーゼ白州工場
 - 11 LAS CASAS
- 1995 59才 女子美術大学非常勤講師
- 1996 60才
 - 12 シャトレーゼ豊富工場
 - 13 岡山県営中庄団地2期

14 桜台の家II Tj8312

15 上北沢の家 Tj8302

16 美しヶ丘の家 Tj8302 Jk0611

17 代官山の家 Tj8312

18 川和の家 Jt8305

19 善福寺の家I

20 五本木の家II Jt8712

21 下馬の家I Jt8305

22 宮前の家

23 代田の家

24 早宮の家

25 桜台の家III Jt8705 Jk1806

26 本町の家 Jt8910

27 代沢の家 Jt8910

28 善福寺の家II

29 四谷の家

30 浜田山の家 Jt8910

31 吉浜の家 Jt9001

32 久ヶ原の家 Jt9103

33 江古田の家

34 上目黒の家II Jt9206

35 軽井沢の家I Jt9611

36 鎌倉の家IS Jt9103

37 山中湖の家 Jt9611

38 津田沼の家 Jt9309 Jk1806

39 柏の家IS Jt9202

40 獅子ヶ谷の家

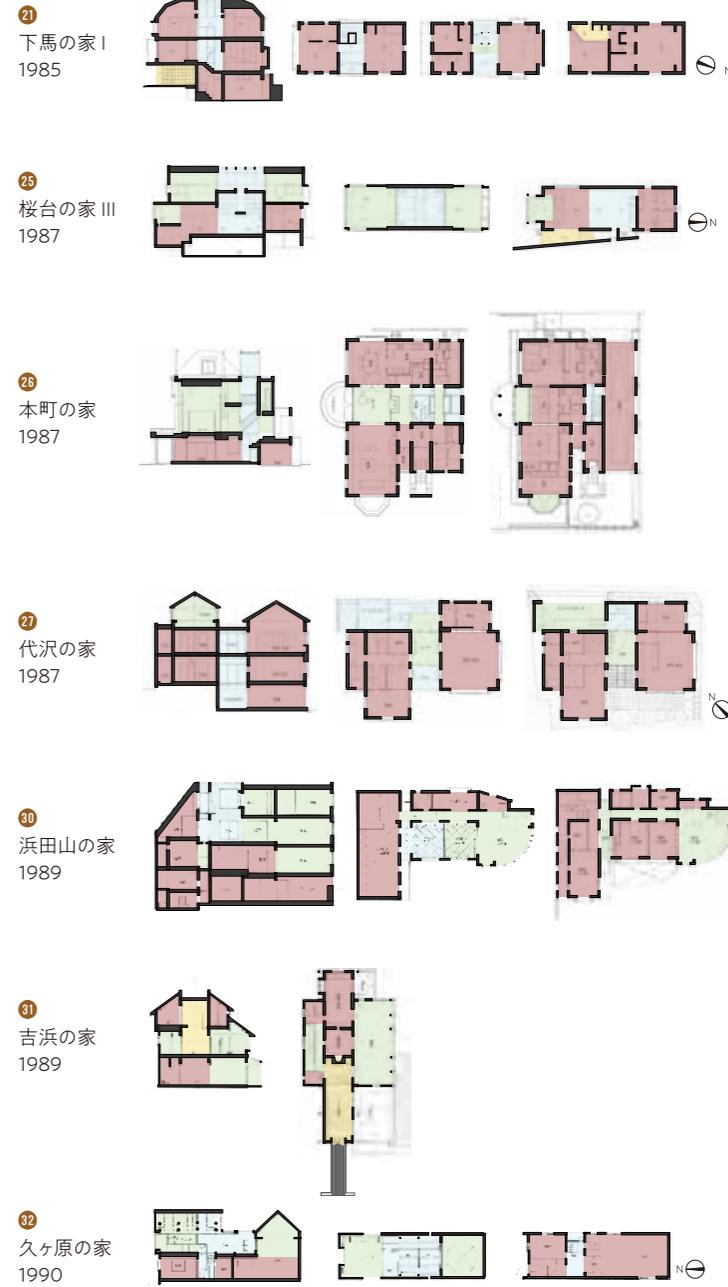
41 駒込の家 Jt9604

42 柿木坂の家 Jt9604

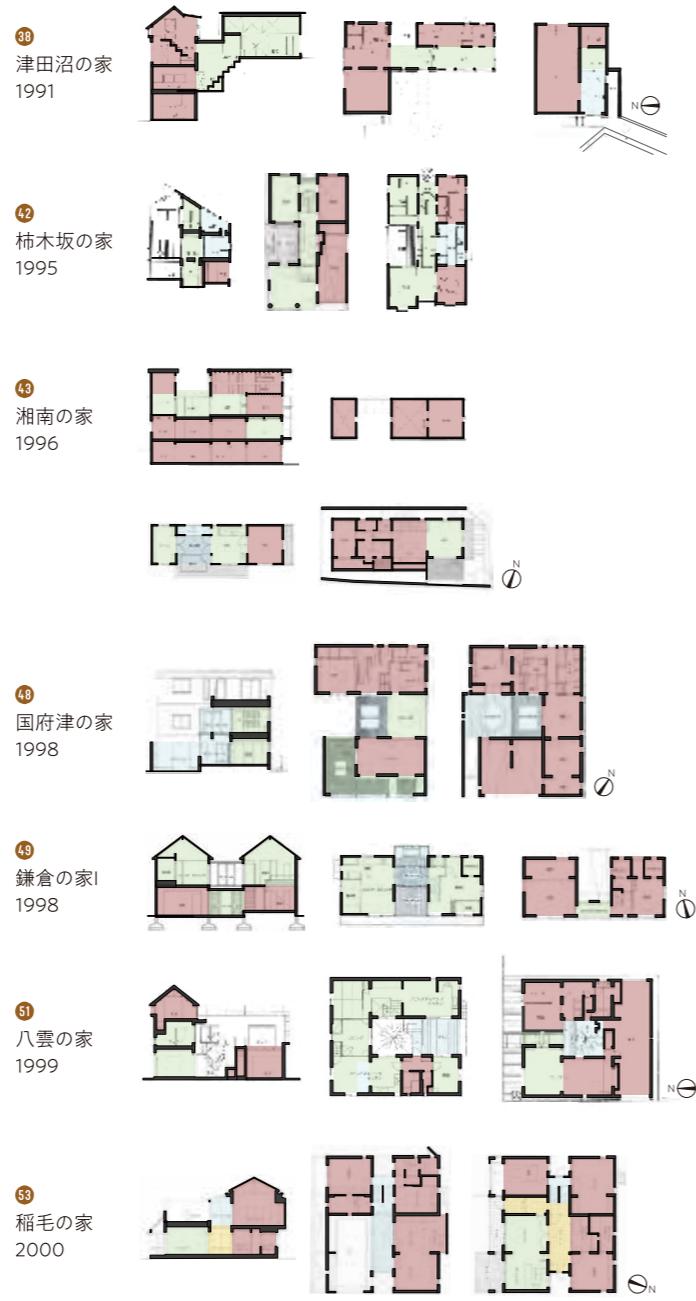
43 湘南の家 Jt9902

44 経堂の家

45 小山の家



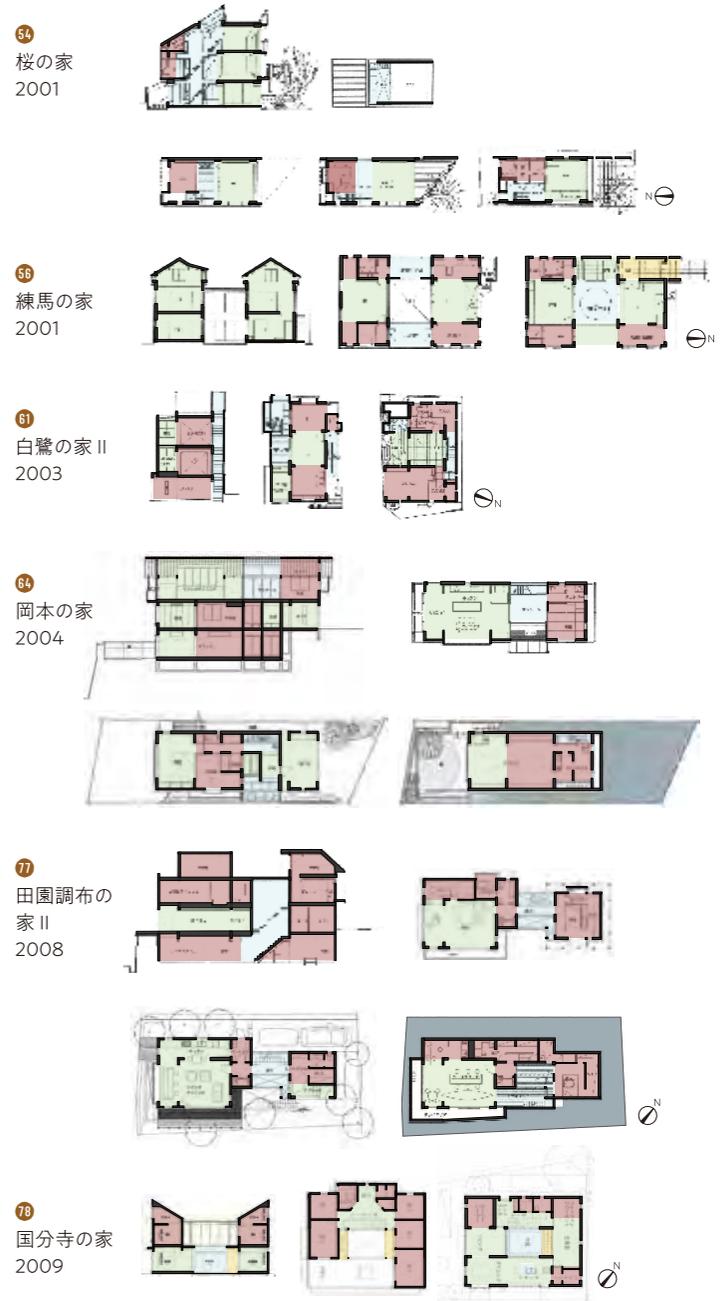
- 1997 61才 46 五本木の家III
- 1998 62才 14 南外科泌尿器科
- 1999 63才 47 嬌恋の家 J19808
- 2000 64才 48 国府津の家 J19902
- 2001 65才 49 鎌倉の家I J19902
- 2002 66才 50 北町の家
- 2003 67才 51 八雲の家 J19912
- 2004 68才 52 上目黒の家III
- 2005 69才 53 稲毛の家 J10012
- 2006 70才 54 桜の家 J10312
- 2007 71才 55 新松戸の家II
- 2008 72才 56 練馬の家 キッチンのつくり方
- 2009 73才 57 滝野川の家
- 2010 74才 58 上麻生の家
- 15 横浜雙葉学園・西棟
- 16 上井草グループポエンデ
- 17 シャトレゼガトーキングダム 札幌ホテル
- 59 代々木上原の家
- 60 大山台の家
- 61 白鷺の家II J10502
- 62 神宮の家
- 63 軽井沢の家II
- 64 岡本の家 J10502
- 65 中央町の家
- 66 中新井の家
- 18 アトリウム・Tアネックス
- 67 軽井沢の家III
- 68 下馬の家II
- 69 新市街の家
- 70 谷中の家
- 71 栗原の家
- 72 柏の家
- 73 浜田山の家II
- 74 よもぎ台の家
- 75 東近江の家
- 76 田園調布の家I
- 77 田園調布の家II キッチンのつくり方
- 78 国分寺の家 J1806 キッチンのつくり方
- 79 北町の家
- 80 大和郡山市の家
- 81 三浦の家 キッチンのつくり方



- 2011 75才 「スタンレー電気技術研究所」 第11回日本建築家協会25年賞受賞
- 2012 76才 「桜台の家」 第12回日本建築家協会25年賞受賞
- 2013 77才 19 オルタシア・T
- 20 吉祥寺ガーデンヒル
- 2014 78才 『暮らしを楽しむキッチンをつくり方』 安立悦子共著／彰国社
- 2015 79才 21 東京国際ゴルフ倶楽部 改装工事
- 22 シャトレゼ台湾微風南京店
- 2016 80才 23 マギーズ東京
- 24 シャトレゼ上白根店
- 2017 81才 映画「蝶の眠り」公開
- 25 菊池医院
- 2018 82才 「前原の家」第18回日本建築家協会 25年賞登録作品
- 2019 83才 26 エビデンワビル
- 2020 84才 ギャラリーエークウッド 「マギーズセンターの建築と庭」展 会場構成監修
- 2021 85才
- 2022 86才 『中心のある家 建築家・阿部勤 自邸の50年』／学芸出版社
- 2023 1月10日 阿部勤 永眠(86才) 「横浜雙葉学園」 第22回日本建築家協会25年賞 登録作品
- 82 神楽坂の家 キッチンのつくり方
- 83 銀閣寺の家 キッチンのつくり方
- 84 八日市の家
- 85 豊橋の家
- 86 与野本町の家 J1309
- 87 御代田の山荘
- 88 鎌倉の家II コンフォルトNo146 キッチンのつくり方
- 89 横浜の家
- 90 三軒茶屋の家
- 91 都筑の家
- 92 五本木の家IV
- 93 目黒の家
- 94 長生村の家
- 95 金沢の家
- 96 葉山の家
- 97 君津の家
- 98 東久留米の家 共同設計
- 99 自由な家 アキチアーキテクト

阿部勤の建築年表:
日本大学生産工学部
建築工学科
渡邊康研究室 制作

模型制作:
菊地 真菜 大石 玲葉
三神 佑太 外立 凜
伊藤 悠実 田尾 春人
鈴木 実倫 深井 泰幸
御園 恵理 浅葉 創太
石丸 利奈





建築家・阿部勤のいえ展

暮らしを愉しむデザイン

2025年4月4日(金) - 2025年6月26日(木)

主催 公益財団法人 ギャラリー エークウッド
岡部三知代 / 徳平 京 / 深澤悠里亜 / 風富嘉津美
西田千秋 / 石井康友 / 真鍋頼子 / 北原英雄

協力 阿部淳、室伏次郎(スタジオ・アルテック)
瀬川史朗(株式会社アルテック建築研究所)
日本大学生産工学部 渡邊康研究室、日本大学芸術学部 若原一貴研究室
株式会社坂倉建築研究所、河内英昭(cue DESIGN)、白杵洋子(ぼんたな)
萬代恭博、マガーズ東京、株式会社学芸出版社、株式会社新建築社

後援 江東区、一般社団法人 東京建築士会

編集 / 発行 公益財団法人 ギャラリー エークウッド
デザイン 秋山和生(kabastudio/east)
映像制作 森内康博、田村 大(らくだスタジオ)
会場制作 株式会社エヌテック
アドバイザー 酒井忠康(元世田谷美術館館長)
木下直之(静岡県立美術館館長)
和氣雅子(株式会社AWP 代表)

関連イベント

対談「建築家と作家の<いえ>談義」

日程 2025年4月17日(木) 18:30~20:00

講師 中村好文(建築家)

松家仁之(小説家)

場所 東陽町ぐりんたす2階ホール(東京都江東区南砂2-5-14)

トークショー「阿部勤の<いえ>を語る」

日程 2025年4月25日(金) 18:30~20:00

講師 渡邊 康(建築家、日本大学生産工学部教授)

若原一貴(建築家、日本大学芸術学部教授)

聞き手 磯 達雄(建築ジャーナリスト)

場所 東陽町ぐりんたす2階ホール(東京都江東区南砂2-5-14)

トークショー「阿部勤の<いえ>原点を語る」

日程 2025年5月30日(金) 18:30~20:00

講師 室伏次郎(建築家、スタジオ・アルテック)

大西麻貴(建築家、「大西麻貴+百田有希/o+h」共同主宰)

場所 東陽町ぐりんたす2階ホール(東京都江東区南砂2-5-14)



ギャラリーエークウッド公式ホームページ
<https://www.a-quad.jp/>

会場風景
撮影 八木元春

©2025 GALLERY A⁴
本書の一部または全部を複製、転載することを禁じます。